

# 中村守・裕子作 「ムラハチ」

(効果音) (クラスのガヤ)  
ナレーション ここは青春中学2年C組。さわやかな若葉の季節を迎え、みんな新しいクラスにも慣れ、教室も落ち着いてきた感じです。そんなある月曜日の朝。

(効果音) (駆け込んでくる足音)  
中井勉 おーい、おーい、すげえぜ すげえぜ。  
水島明子 なあに、中井君。そんなに鼻の穴あっ広げて。どうしたのよ。  
中井 見たぞ 見たぞ、転校生。今、うちの担任と下の職員室で話してたぞ。母親も一緒だったぜ。うちのクラスだぜ。  
沢村恵子 本当？ それでどんな子？  
中井 “どんな子”って、そうだなあ。ちょっとひと言じゃ言い表せないなあ。うーん、そうだなあ。本田美奈子なんてもんじゃないなあ。キョンキョンとも違うし。そう、今の芸能界は軽く超えてるカワイイ子ちゃんだな。  
岡崎英雄 すげえ。なんとなく物足りなかった今日このごろ、やっとおれも燃えてきたぜ。  
中井 それがよ、一緒に母親もすっげえ美人なの、これが。佐久間良子ばりだぜ。  
一同 (口々に)すごいなー。  
中井 おい、隆、お前はどうなんだよ。そんな、気取って本なんか読んじゃって。お前、教会に行ってるそうだけど、お前だって、カワイイ子ちゃんには興味あるんだろ？  
井上隆 まあな。  
中井 おー、話せる。見直したぜ、隆。  
ナレーション …と冷やかされているのは、井上隆。中1の時にバプテスマ＝洗礼を受けたクリスチャンでした。そのいつもまじめな態度と、何よりも、何か問題を抱えている人がいると、親身になって相談に乗る彼の存在は、クラスのだれからも、そういう委員長の岡崎君からも一目置かれていました。

(効果音) (始業のチャイム)  
ナレーション と、そこへ、うわさどおり、担任の先生と一緒にホームルームの教室に入ってきたのは、だれが見てもかわいい少女でした。  
岡崎 起立。礼。着席。  
先生 やあ、おはよう。今日から一人、皆さんの仲間に入る人を紹介する。長岡美由紀さんだ。長岡さんのお父さんは、仕事で今までイギリスのほうにおられたが、今年日本に戻られた。長岡さんも3年ぶりの日本だそうだが、みんないろいろと教えてあげて、親切にしてほしい。いいな？

長岡美由紀 長岡美由紀です。よろしくお願ひします。

先生 じゃ、長岡さんの席は、井上隆の隣だ。井上、よろしく頼むぞ。

中井 おー、隆。いいなあ。普段のまじめのご褒美かよ。

ナレーション 普段は何事にも動じない隆でしたが、この時ばかりは胸の鼓動が響き渡り、耳たぶまでぼてっててくるのが自分でも分かりました。そして昼休み。

中井 美由紀さん、僕、中井です。中井勉。よろしく。あのー、美由紀さん、イギリスにいたんですって？ 僕、イギリス、好きだなあ。

岡崎 おれ、岡崎英雄。エイユウって書きます。一応クラス委員長やってんだ。よろしく！

ナレーション こう言って売り込んでる声の主は、岡崎君。お聞きのようにクラスの委員長をやりながら、バスケの部長もやっている人気者のスポーツマンです。クラスの男子は皆、美由紀を取り囲み、教室の窓からはほかのクラスの生徒まで、覗き込んでいます。

明子 ちょっとお、何、あの男子の態度。バッカみたい。「美由紀さーん」なんて甘い声出しちゃって。

恵子 そうよ。ちょっとかわいいからって、気取っちゃって。ねえ、礼子、なんとか言いなよ。あんたの人気が、みんなあの美由紀って子に行っちゃってるよ。委員長の岡崎君もだよ。いいの？

野沢礼子 ほっときなさいよ。そのうち冷めるわよ。

明子 ワー、さすがぁ。余裕ねえ。

礼子 当たり前よ！

ナレーション と、胸を張って見せたのは、野沢礼子。クラスの副委員長です。でも内心はあまり穏やかではありませんでした。というのも、彼女は委員長の岡崎君にひそかに恋をしていたからです。

その夜、机に向かった礼子は、引き出しから日記帳を取り出すと、ペンを走らせました。

礼子 「今日来た転校生、長岡美由紀。確かにかわいい。男子はみんな騒いでる。委員長もだって。礼子、お前の心は騒いでる？ いいえ、わたしは礼子。騒ぎはしない。そんなの、わたしのプライドが許さない。クラスの男子がみんなあの子に夢中だって構わない。けど、委員長も？ わたしにとって大切な人はただ一人。委員長、あなただけです。あなたさえわたしのほうを見ていてくれたら、それでわたしは幸せです。だからお願ひ、美由紀なんかに心を向けないで！」

ナレーション 次の日、相変わらずクラスは美由紀旋風…。

明子 ねえ、礼子。なんとかしてよ、あのバカ男子たち。礼子の貫禄で、クラスをなんとか落ち着かせてよ。

恵子 そうよ。それに、一番悔しいのは礼子じゃないの？ 岡崎君、もう完ぺきにイカ

れちゃってるよ。

礼子 まさか。バカなこと言わないでよ。さあ、勉強 勉強。

ナレーション 礼子は、みんなの声を振り払って、机に向かい、教科書を開きました。でも彼女の心の目は、自然と委員長の岡崎君のほうに注がれているのでした。

岡崎 美由紀さん。おれも小学生の時、3年間イギリスに行っていたんだ。おれはロンドンだったけど、君はどこ？

美由紀 わたしはリバプールでした。ワー、でもうれしいわ。イギリスのことが分かる人がクラスにいるなんて。

岡崎 そうそう、君はしばらく日本を離れていたから、何かと戸惑うことが多いだろう。この本を読んでみるといいよ。「日本見たまま」。現代の日本の様子が、分かりやすく、面白く書いてあるよ。おれ、もう読んだから、君にあげるよ。

美由紀 えー、いいの？ どうもありがとう。

中井 よ、ご両人。焼けちゃうぜ。でもお似合いだな。チエ、チエ、チエ。

(効果音) (「ガタ！」とイスが動く音)

ナレーション その時、荒々しく席を立ったのは礼子でした。

明子 あ、礼子、どうしたの？ 顔色変えて。

恵子 何があったの？

礼子 ちょっと、みんな来て。わたしやるよ。

明子 「やる」って、何を？

礼子 あの美由紀を…ムラハチ！

(一瞬の沈黙)

明子 そう来なくっちゃ、礼子。よーし、わたし、クラスの女子、みんな集めちゃおう。

ナレーション 次の日から、青春中学2年C組は、ただならぬ雰囲気に包まれました。女生徒全員が美由紀を村八分にし始めたのです。

美由紀 明子さん、次、理科でしょう？ 実験室ってどこですか？ 一緒に連れてってください。

明子 .....

恵子 明子、さあ早く行こう。カワイイ子ちゃんは男子にお任せ お任せ。

ナレーション そしてここは実験室。

先生 今日は6人ずつのグループに分かれて、お楽しみのカエルの解剖をする。

(効果音) (ガヤ)

先生 なるべく男子、女子、それぞれ6人ずつのグループを作ること。去年のクラスで男女混合にしたら、女子はみんな男子に任せちゃったからな。さあ、早く分かれて。

明子 どうする、美由紀のこと？ どこかのグループに入れる？

礼子 ダメよ。ムラハチ！

ナレーション 女子生徒は申し合わせたように、美由紀を外して、自分たちだけで6人ずつのグループを作り、さっさと実験の準備を始めました。

明子 キャー、気持ち悪い。バタバタしてる。

恵子 早く酔っ払う。ベチャベチャ気持ち悪いのは、カエルでも人間でも早く眠らせちゃうことだよ。

中井 あーあ、女たちも露骨だなあ。顔もブスなら心もドブスだ。美由紀さん、僕たちのグループに入りなよ。

美由紀 あ、ええ、でも…。

隆(モノローグ) ひどいな、女子は。長岡さん、すっかりしょげちゃって。座り込んでしまった。あれはきっと野沢さんの仕業だ。

ナレーション そう思いながら、ひそかに心を痛めて祈っていたのは隆でした。日に日に激しくなる村八分に、美由紀は必死に耐えているようでしたが、とうとうある日、イギリスで誕生日に父に買ってもらったジャケットがなくなり、泥まみれになって、雨の校庭に捨てられているのを見た翌日から、学校に来なくなってしまったのです。その日の放課後、意を決した隆は礼子を呼び止めました。実はゆうべ、委員長の岡崎君から彼女のことで相談を受けてもいたからです。

隆 野沢さん。ちょっと話があるんだけど、いい?

礼子 なあに、井上君?

隆 あのさあ…。

礼子 何よ。用があるなら早く言ってよ。わたし、これから部活よ。

隆 あのう、このごろの女子のことなんだけ…。

礼子 女子がどうかした?

隆 うん。みんな長岡さんのことムラハチにしているみたいだけど、どうして? 彼女、ムラハチにされる理由なんてないと思うけど。それに、ちょっと聞いたんだけど、ムラハチにすると言い出したの、野沢さんなんだって?

礼子 だれがそんなこと言ったの?!

隆 僕、正直言ってショックだったよ。いつも冷静な野沢さんらしくないと思う。女子がムラハチって言い出したら、それを止めるのが副委員長の君の役目じゃないの? こんなこと言つていいかどうか分からないけど…。君、ねたんでんじゃないかな?

礼子 わたしが? どうしてわたしがねたまなきゃいけないのよ!

隆 男子みんなが、長岡さんと友達になりたがっているだろ? それに岡崎まで。君が彼のこと好きなの、僕は知ってる。でも、だからと言って…。

礼子 (かぶせて)うるさいわね。あんたなんかに何が分かるの? まじめぶって何よ。クリスチャンだかなんだか知らないけど、余計なおせっかいはやめてよ。

隆 ごめん。ただ、岡崎が心配して相談に来たもんだから。それに僕も、クラスの

みんなに仲良くしてもらいたかったし…。

礼子 委員長が？ 井上君に？

隆 ああ。あいつも、君があいつのこと好きなのは知ってるんだ。あの、これ、君に渡してくれって。

ナレーション そういうって渡されたのは、岡崎君からの手紙でした。

礼子 「礼子、面と向かって言うの照れくさいから、書きます。君がおれのこと好きなのは(岡崎の声に)前から分かっていた。おれも君のこと、嫌いじゃない。でも、このごろの君、少しおかしいぜ。長岡さんのムラハチは汚いよ。おれたちは、3年ぶりで日本に帰ってきて、いろいろと不慣れな彼女に、早く慣れてもらおうと思って親切にしてるだけなんだ。あの子のこと、全然メじゃないって言ったらウソになるけど、でもそんなんで君への気持ちは変わらないよ。マジだぜ、おれ。それを、なんだよ、おれの気持ちを確かめもしないで、なんの罪もないあの子に、君のねたみをモロにぶつけるなんて、最低だよ。ムラハチされた者の気持ちになってみろよ、礼子。そんな、弱い人の心の痛みが分からないようなやつなら、はっきりお断りだよ。井上が教えてくれたよ。そんなのが人間の心の「罪」なんだって。

礼子、以前の、明るい、優しい君に戻れよ。おれ、その日を待ってる。

礼子 岡崎君…。

ナレーション 礼子は、思わず涙がこみ上げてくるのを、慌てて抑えました。それは、うれしさと、恥ずかしさと、そして、美由紀に対するすまなさの入り混じった涙でした。そんな彼女を見ながら、隆は心の中で、「神様、ありがとう」とつぶやいたのでした。

<完>